

『冬の日注解』の板木

永井一彰*

要旨

『冬の日注解』（升六著、文化六年菊舎太兵衛刊）について、諸版本を調査した上で、現存する板木一枚を手掛かりに全体の板木の仕立て方を推察し、その出版の背景に重板（海賊版）絡みの問題が潜んでいることを明らかにする。

キーワード…俳諧七部集、冬の日、板木、版權

『冬の日注解』の板木については平成十二年十月に記者発表を行い、各紙の記事に概略は紹介済みであるが、その折には意を尽くせなかったことも含め、ここ数年間の板木再調査及び版本との照合の過程で新たに浮かび上がってきた同書の出版に関わる問題について整理してきた。

『冬の日注解』の版本

まずは管見に入った版本について触れておこう。『冬の日注解』の版本は、文化六年の年記の入ったⅠ文化六年版と、年記の無いⅡ刊年不明版の概ね二種に分けられる。

Ⅰ 文化六年版

①奈良大学図書館蔵本（911・3/k041）

半紙本一冊。縦224×横157耗。薄縹色の元表紙。綴糸は白で、はずれかかっているが、元糸と見受けられる。表紙中央上部に無辺白地元題簽「冬の日注解 乾」を貼り、「乾」を見せ消ちにして、右側に「全」と墨書きする。乾・坤二冊の合冊本。章末図1参照。なお、題簽の下にもう一枚の題簽が貼っており、一部を剥がして覗いてみると、どうやら同じ板の「冬の日注解 乾」の題簽であるらしい。それが「坤」であれば合冊の際の操

作ということになるが、「乾」を二枚重ね貼りとした理由不明。丁付は版芯下部にある。乾巻は、寛政八年丙辰初冬玉屑観応序二丁（丁付なし）、編者升六の自序「序一・序二」、凡例「序三」、本文「上一（上三十五）」で、坤巻は本文「下一（下二十、二十一）二十四、下二十五（下三十八）」で、「二十一（二十四）」の四丁は「下」を落とす。刊記は下三十八裏に、「冬日解 小本一冊既刻／闕更説 車蓋著」という広告に並べ「寛政八辰七月官許／文化六巳正月発兌／蕉門俳諧書林／三条寺町西 菊舎太兵衛梓」とある（図2）。その後「菊舎太兵衛蔵」の「蕉門俳諧書目録」三丁半を添付する。ただし、この目録は中本用のそれ。収録書目は、七部拾遺・四部録（未刻）・格外弁・三草紙・芭蕉談・冬の日注解・かけはし・道の便・梅翁宗因発句集・世説・芭蕉翁消息集・去来文・麻かり・一夜四歌仙・同続・蕉門中興六家集・四季詞寄袖たため・四季詞寄糸車・蕪村七部集・同文集（未刻）・玉藻集・楞良集・楞良拾遺・百家仙・八仙歌・若葉集・伊丹風流・今風流・桃しろみ・俳題正名・俳諧新式・俳諧一枚起請・蕉門一夜口授・季奇手勝手の三十四点。中に文化六年一月刊行の蕪村七部集が見え、また「同文集」を未刻として載せる。蕪村翁文集の刊行は文化十三年春のこと。従ってこの「蕉門俳諧書目録」は概ね文化六年一月以降十三年以前のもので考えてよく、期的には『冬の日注解』の刊記にほぼ見合うということになる。

② 酒竹文庫蔵本（酒竹327）*マイクロフィッシュによる

半紙本二冊。表紙中央上部に無辺白地元題簽、「冬の日注解 乾」冬

の日注解 坤」。乾巻の題簽は奈良大本と同板。内容は、乾・坤とも奈良大本と同じで、同板。下三十八ウに奈良大本と同じ刊記。ただし、「蕉門俳諧書目録」は無い。

③ 綿屋文庫蔵A本（わ・201・37）*マイクロフィッシュによる

半紙本一冊、乾坤合冊。フィッシュでは元表紙と見える。布目地。左肩に無辺元題簽、「冬の日注解 乾坤」。「坤」の部分は書き入れか。奈良大本と同板。内容も乾・坤とも奈良大本と同じで、同板。下三十八ウに奈良大本と同じ刊記。「蕉門俳諧書目録」は無い。

④ 綿屋文庫蔵B本（わ・201・38）*マイクロフィッシュによる

半紙本二冊。フィッシュでは元表紙と見える。布目地。中央上部に無辺元題簽、乾・坤とも同じで「冬の日注解」。奈良大本とは異板。内容は乾・坤とも奈良大本と同じで、同板。下三十八ウに奈良大本と同じ刊記。「蕉門俳諧書目録」は無い。

⑤ 中大図本*国文学研究資料館提供の写真による

半紙本二冊、元表紙らしく見える。坤巻、題簽欠。乾巻、表紙中央上部に無辺元題簽。「冬の日注解 乾」。②の酒竹文庫蔵本と同板。下三十八ウに奈良大本と同じ刊記。「蕉門俳諧書目録」は無い。

⑥ 京大頼原本*国文学研究資料館提供の写真による

半紙本二冊、元表紙らしく見える。どちらも表紙中央上部に無辺元題簽。「冬の日注解 乾」「冬の日注解 坤」。乾坤とも②酒竹文庫蔵本と同板。下三十八ウに奈良大本と同じ刊記。「蕉門俳諧書目録」は無い。

II 刊年不明版

これは、i 巻末に諸名家の句集を添えるものと、ii それが無いものの二種に分けられる。

i 諸名家句集添付本

⑦竹冷文庫本（竹冷704）*マイクロフイッシュによる

半紙本二冊。乾巻、題簽欠。坤巻、表紙中央上部に無辺元題簽「冬の日注解 坤」。②の洒竹本と同板らし。本文は、乾巻は奈良大本と同じで同板。坤巻も三十八丁表までは奈良大本と同じで同板。但し、三十八丁ウは余白で刊記なし。余白部右下に墨の汚れあり。巻末六丁（丁付一・二・三・三・四・五）に「日記を撰て諸名家の句をこゝに加ふ」として、闌更以下諸家の発句百三十六章を収録。刊記は後表紙に貼り付け「蕉門俳諧書林／京三条通寺町西江入ル／菊舎太兵衛」とある。

⑧麗澤大田中本*国文学研究資料館提供の写真による

半紙本二冊、元表紙らしく見える。どちらも表紙中央上部に無辺元題簽。「冬の日注解 乾」、「冬の日注解 坤」。乾坤とも②の洒竹文庫蔵本と同板。下三十八ウに刊記なく、余白。右下に墨の汚れ（章末図7参照）。⑦の竹冷文庫本と同様に、巻末六丁に闌更以下諸家の発句百三十六章を収録。刊記は後表紙に貼り付け「蕉門俳諧書林／京三条通寺町西江入ル／菊舎太兵衛」とある。刊記部、⑦の竹冷文庫本と同板。

ii 諸名家句集無添付本

⑨青森県図工藤本*国文学研究資料館提供の写真による

半紙本二冊、布目地元表紙。どちらも表紙中央上部に無辺元題簽。「冬

の日注解 乾」、「冬の日注解 坤」。乾坤とも②の洒竹文庫蔵本と同板。下三十八ウに刊記なく、余白。右下に墨の汚れ。巻末に①の奈良大学図書館蔵本と同じ広告あり。

⑩今治市河野美本*国文学研究資料館提供の写真による

半紙本二冊、元表紙らしく見える。どちらも表紙中央上部に無辺元題簽。「冬の日注解 乾」、「冬の日注解 坤」。乾坤とも②の洒竹文庫蔵本と同板。下三十八ウに刊記なく、余白。右下に墨の汚れ。巻末に①の奈良大学図書館蔵本と同じ広告あり。ただし、「俳題正名」以下、未刻。後表紙見返しに「蕉門俳諧書林 京三條通寺町西江入ル町 菊舎太兵衛梓」。この刊記部、⑦の竹冷文庫本とは異板。

⑪松宇文庫本*国文学研究資料館提供の写真による

半紙本二冊。被せ表紙のため、原本表紙の様子不明。下三十八ウに刊記なし。右下に墨の汚れ。その余白部に文化六年版の刊記を墨書きし、「他本此奥書アルノミニテ本文ニ変リタルコト無シ」とする。その後、半紙本サイズの菊舎の「俳諧書目録」一丁を添える。収録書目は、芭蕉翁消息集・宗因発句集・四部録・道はし・指要・三部集・冬の日注解・季寄袖疊・（新）五子稿・蕉門中興六家集・半化坊発句集 同後篇・芭蕉新巻・点印論・格外弁・蕉翁七部拾遺 同後篇・玉藻集・樗良句集・五筑房発句集・樗良七部集・去来文・三草紙・一夜四歌仙・力杖・統一夜四歌仙・俳諧世説・発句類葉集の二十八点。うち、蕉翁七部拾遺（俳諧七部拾遺）が享和二年九月刊であるから、この目録はそれ以降のもの。刊記は後表紙に貼り付け「蕉門俳諧書林／

京三条通寺町西江入ル／菊舎太兵衛」とある。この刊記部、⑦の竹冷文庫本と同板。

右のうち、⑤中大図本・⑥京大穎原本・⑧麗澤大田中本・⑨青森県図工藤本・⑩今治市河野美本・⑪松宇文庫本については本文の照合が出来ていないので断定は憚られるが、①奈良大学図書館蔵本・②洒竹文庫蔵本・③綿屋文庫蔵A本・④綿屋文庫蔵B本・⑦竹冷文庫本の範囲で言えば、本文は同板と見なされる。以上のように管見によれば、『冬の日注解』には①～⑥の文化六年版と⑦～⑪の刊年不明版がある。どちらが先行するかが実は問題になるのだが、それについては後で触れる。

『冬の日注解』の板木

現存板木は、上巻の二十九～三十二を収める四丁張りの一枚。概寸は幅180×丈70×厚さ18耗。章末図版の図3が二十九・三十を収める板木の表面、図4が三十一・三十二を収める裏面。図5は表面の拓本複写で、図6が裏面のそれ。通常の板木に見られる反り止めの処置が施されておらず、左右側面にそれぞれ「冬日注カイ」と墨で書入れがある。戦後に藤井文政堂から流出した板木約五百枚を平成十年頃に大書堂経由で奈良大学へ引き取った折に、やはり大書堂から入ったものであるが、文政堂旧蔵であったのかどうかはつきりしない。板木・拓本と版本の該当の丁を照合してみると、欠刻部等一致し、間違いなく元

の板木である。

この板木が出てきたことにより、『冬の日注解』の板木の仕立て方が判明する。文化六年版に沿って見てみよう。この板に上巻29～32丁を収めていることからすると、上1～28は同様に四丁張りで七枚。上33・34・35は二丁分が余白となる三丁張りの一枚。下巻の21～24は丁付部の「下」を落としているが、これは同一の板であったと見て間違いない。その前後は1～20で五枚、25～36で三枚。下37・38の二丁と玉屑序二丁、自序二丁、凡例一丁で計七丁。これを一枚の板に収めて、その余白一丁分かもしくは上巻末尾の板の余白一丁分に題簽を入れたと考えるとよからう。仮に袋があったとするとそれを彫る余裕もあり、四丁張りで合計二十枚という計算になる。

刊記の不審

板木と版本を照合する過程で、大きな問題として浮かび上がってきたのが刊記のことである。先に諸本の項で取り上げた①～⑥は、刊記部に「寛政八辰七月官許／文化六巳正月発兌」とある。玉屑の序文が「寛政八年内辰初冬」であるので、七月に官許を得た上で十月頃には序文も用意し出版の段取りは整っていたはずである。それが、十三年後の文化六年までずれこんでしまったのは何故であろうか。そこにはおそらく『冬の日』の版權問題が絡んでいる。安永三年十一月の小本『俳諧七部集』刊行の段階で七部集の版權は、『春の日』は西村市郎右衛

門に、『冬の日』以下の六集は井筒屋庄兵衛に属していた。この小本『俳諧七部集』は版權所有者である井筒屋・西村に断わりなく江戸の富田新兵衛が勝手に出してしまい、出入りを経て相版に落ち着いたものであること、その板木は江戸に留め置かれて富田と共に相版元として名を連ねる山崎金兵衛が管理していたと思われることなど旧稿「『芭蕉』という利権（一）」（奈良大学紀要31号）に詳述した。その後、井筒屋は天明の京都大火で罹災し、蔵板を全て焼失。『冬の日』以下、半紙本七部集の板木も失ってしまふ。天明五年頃に京都出版界から消息を絶つ西村の『春の日』の板木の行方は知れぬが、大火後の『春の日』の扱いから見ても、その版權は大火時には井筒屋へ動いていたと考えて不自然ではない。この半紙本七部集は、寛政七年三月に至って筒井庄兵衛・中川藤四郎・野田治兵衛の三軒相版として再刻再版されることになるのだが、その刊行を挟んで『冬の日』の注釈書を巡る重類版の一件があった。これについても旧稿「七部解と七部木槌」（大谷大学『文芸論叢』61号）に詳述したところであるが、いまその要点を記せば次のようになる。書誌等詳細については旧稿を参照されたい。

井筒屋庄兵衛・橘屋治兵衛・大和屋吉兵衛の三軒相版で『俳諧七部解初篇冬の日』（以下「七部解」と略称）が出たのは同書に「寛政六年寅仲春 木蔭庵」の序文があるので、寛政六年二月頃のこと。これに村上勘兵衛を加えた四軒版もある。ところが、翌七年十一月に東都の衡山堂小林長兵衛が『冬の日俳諧七部木槌』（以下「七部木槌」と略称）を出す。両書照合してみると、『七部木槌』の注は70%近くが『七部解』

によっていることが分かる。『七部木槌』には『七部解』の誤りを修正する意識も見られはするものの、小本という書型・紛らわしい書名・内容の重複からこれは明らかな重板で、『七部解』の版元がそれを見逃すはずはなかった。『上組済帳標目』（以下『済帳』と略す）の「寛政八年辰五月ヨリ九月マデ」の部に次のようにある。

一、俳諧小槌冬の日ノ部小本、江戸表出版。野治其外相合より指構口上書、大坂行事へ差下候事。

そして、この一件は板木・摺本没収という重板事件の原則通りことが運んだらしく、野田は衡山堂から取り上げた『七部木槌』の板木をそのまま使って、寛政九年正月に村上勘兵衛との相版で『冬の日句解』と新たに題し、出版している。菊舎が『冬の日注解』の「官許」を得たという「寛政八年七月」はこの差し構えの真最中で、井筒屋・橘屋らが菊舎の企画に気がつかなかったとは思われない。のみならず、菊舎は別件差し構えの当事者でもあった。それは『発句題林集』に関わる差し構えである。詳細はやはり旧稿「『笈の小文』の板木」（奈良大学総合研究所報18号）に譲るが、寛政六年夏に菊舎が勝田吉兵衛との相版で出した『発句題林集』は、板木が中本仕様であるにも関わらず半紙本仕立てとし、かつ春・夏・秋・冬・雑の五冊本の冬の冊に刊記を入れるという異例の構成をとる。『済帳』によれば、この書については、寛政七年から十年にかけて大坂・京・江戸の本屋から三件の差し構えがあり、寛政八年には書名の勝手な改変と「丁数願写本ト相違」している故を以って、一時「売買差留」の処分も受けている。そ

して、『済帳』には記録されていないが、幾つかの差し構えを吸収する形で書名を変更し最終的に相版の中本に落ち着いた『題林発句集』の刊記部書肆名「皇都／井筒屋莊兵衛・野田治兵衛・勝田吉兵衛・浪花／河内屋太助・塩屋忠兵衛」から、井筒屋と橘屋が『発句題林集』を『類題発句集』（安永三年刊）『新類題発句集』（寛政五年刊）の類版と見做し差し構えを起したと推定されること、旧稿に述べた通りである。因みに、最終版では主版元の勝田吉兵衛の名前が残り、菊舎の名前は出てこない。『発句題林集』の紛らわしさを菊舎がどの程度自覚していたかは判らないが、いかがわしい書物に関わったことは事実で、それがまた『冬の日注解』が「官許」を得た時期と重なるのである。かような状況下でいくら「官許」を得たとはいえ、『冬の日注解』の刊行がすんなり運ぶわけがない。井筒屋・橘屋がその企画を見咎め、差し構えに及んだことは十分に考えられる。そして、『冬の日注解』の刊行がずれ込んだもう一つの理由は、井筒屋から諧仙堂浦井徳右衛門への版權譲渡である。文化再刻版の小本『俳諧七部集』の目録によれば、浦井は遅くとも文化五年十一月には『俳諧七部集』『おくのほそ道』など井筒屋旧蔵の芭蕉関係の主要な書物の板木を蔵板するに至っていたことは明らかだが、その時期は文化三年頃まで溯る可能性があること、これもまた旧稿「『芭蕉』という利権（一）」に述べた。菊舎が『冬の日注解』に関して井筒屋・橘屋と調整を進めているうちに、井筒屋の版權が浦井に動き、さらに調整を重ねて文化六年正月に刊行の運びとなったのであろう。なお、『冬の日注解』刊記部広告に見え

る「冬日解 小本一冊既刻／闕更説 車蓋著」は、先述の『俳諧七部解初篇冬の日』をさす。この書の文化六年当時の版權所有者は橘屋と浦井だった筈で、その販売が菊舎にも任されているという事実は、『冬の日注解』が橘屋・浦井と調整済みで刊行されたことを裏付けている。

『冬の日注解』出版に関わる不審はもう一つある。それは、先に諸本の項で触れた⑦～⑪の刊年不明版の存在である。問題は文化六年版とどちらが先行するかであるが、①～⑥で寛政七年に官許を得たことを殊更に示し文化六年という明確な年記を入れた刊記を、後でわざわざ年次不明とするとは考えにくい。また、原本に拠っていないため印象の域を出ないが、①奈良大学図書館蔵本と⑦竹冷文庫本の本文を照合するに、⑦の方が版面の荒れが少ないような感じがする。それはつまり、刊年不明版の摺刷が文化六年版に先行することを思わせる。そこで、次の痕跡に注目してみたい。図7は⑧麗澤大田中本の下三十八丁ウである。ここに①～⑥に見られる文化六年の刊記はなく余白のまま残してある。注目すべきは右下の墨の汚れで、大きさにばらつきはあるものの、⑦竹冷文庫本・⑨青森県図工藤本・⑩今治市河野美本・⑪松宇文庫本の同じ箇所と同様の墨の汚れが認められる。これは明らかに浚えていない版面に墨が付いて汚れたものである。図8は『相法窺管』（板木分類番号N379）の卷三の三十丁、図9は卷四の二十一丁の板木（分類番号同上）の鏡面図版である。何れも丁の表で巻が終り、裏が余白の扱いとなっている。かように本文を囲む匡郭がある場合は匡郭を彫り出し余白部を浚えておくのが普通だが、この場合は手間を

惜しんだものかあるいは該当箇所が節っぽいのを嫌ったためか、匡郭部に線は入れてあるものの、滲えずに残してある。板木からも分かるように、この面には摺刷に際して墨を刷かない。が、刷毛が板木の滲えていない部分にはみ出すこともあるわけで、『冬の日注解』⑦～⑪本の下巻三十八丁ウ右下に認められる墨の汚れはその痕跡に違いあるまい。それはつまり、⑦～⑪の本が摺刷された時には下巻三十八丁裏には何も彫られていなかったということの意味する。このことから、⑦～⑪の刊年不明版の摺刷は文化六年版に先行すると見えそうな気がする。すると、菊舎は文化六年に浦井・橘屋との調整に至るまでに『冬の日注解』を勝手に出している、ということになる。そこで、II iとして分類した広告を持たない諸名家句集添付本⑦竹冷文庫本と⑧麗澤大田中本に注目してみよう。巻末の諸名家発句六丁はいかにも付け足しという感じを免れないが、これはやはり付け足しだったのでないだろうか。つまり、菊舎が重類版として抗議を受けた時に、「この書は単なる『冬の日』の注釈書ではない」という言い訳をするための措置だったと考えてみてはどうか。が、そのような姑息な手立てが通用するはずもなく、結果的には差し構えとなり、文化六年版に落ち着いて諸名家発句六丁は省かれるに至ったという事情が推測される。すると分らなくなるのは、文化六年版に先行するはずのII ii⑨青森県図工藤本・⑩今治市河野美本・⑪松宇文庫本の三本に、諸名家発句六丁がなく、替りに享和・文化期の目録が添えられていることである。が、これは、文化六年版に落ち着いた後で、先行販売した残部を文化六年

の刊記を入れた本と併行して菊舎が捌いていたと考えると、分かるような気がする。

平成二十五年八月五日稿

*この稿は平成二十四年度奈良大学研究助成によるものである。



図1 文化6年版 表紙

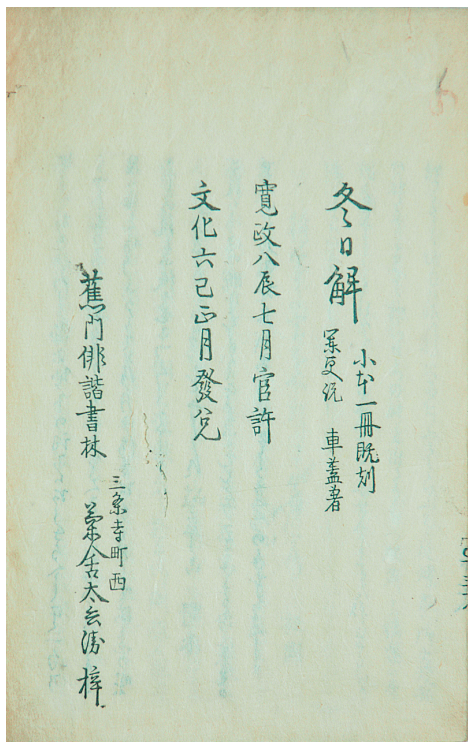


図2 文化6年版 下38ウ

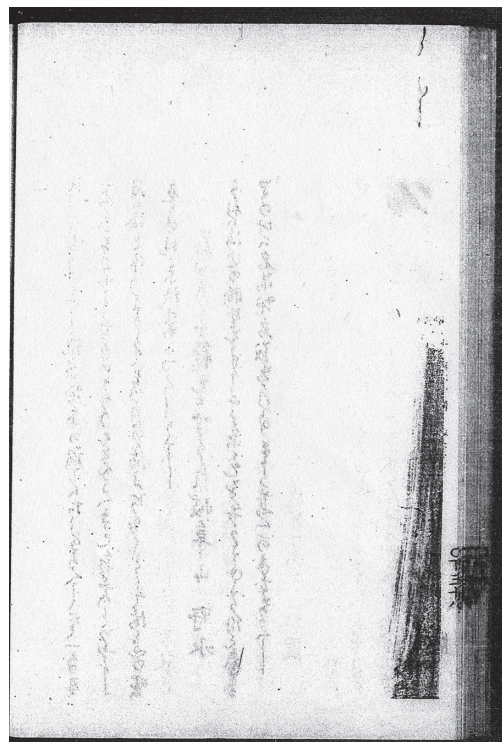


図7 無刊記版 下38ウ

図4 同上 板木 上32丁・31丁

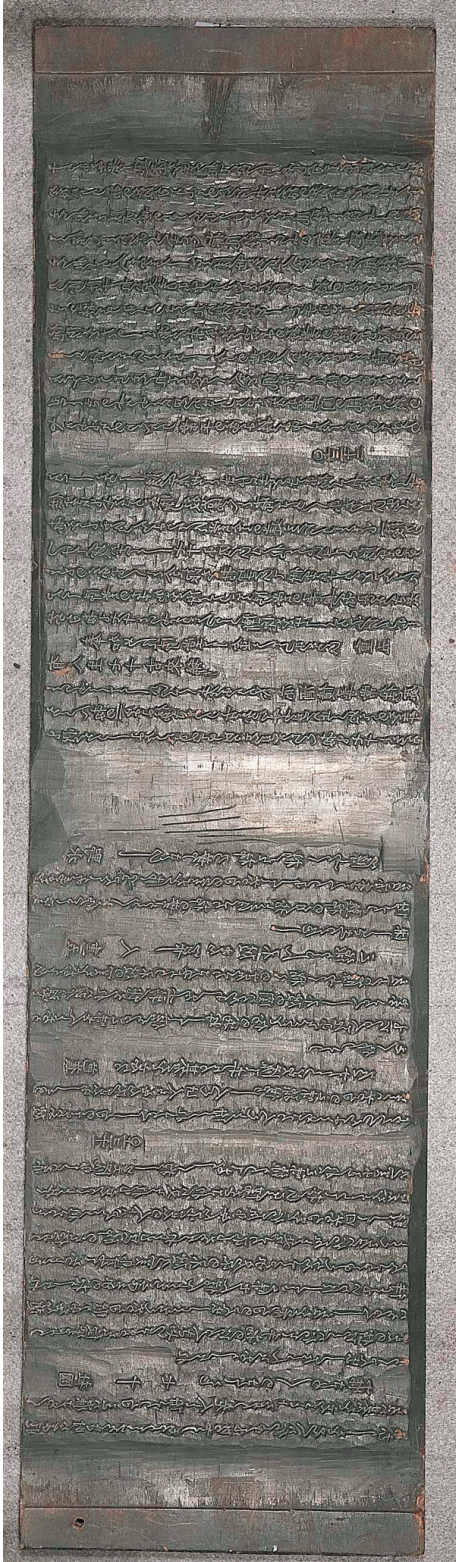


図3 『冬の日注解』板木 上30丁・29丁

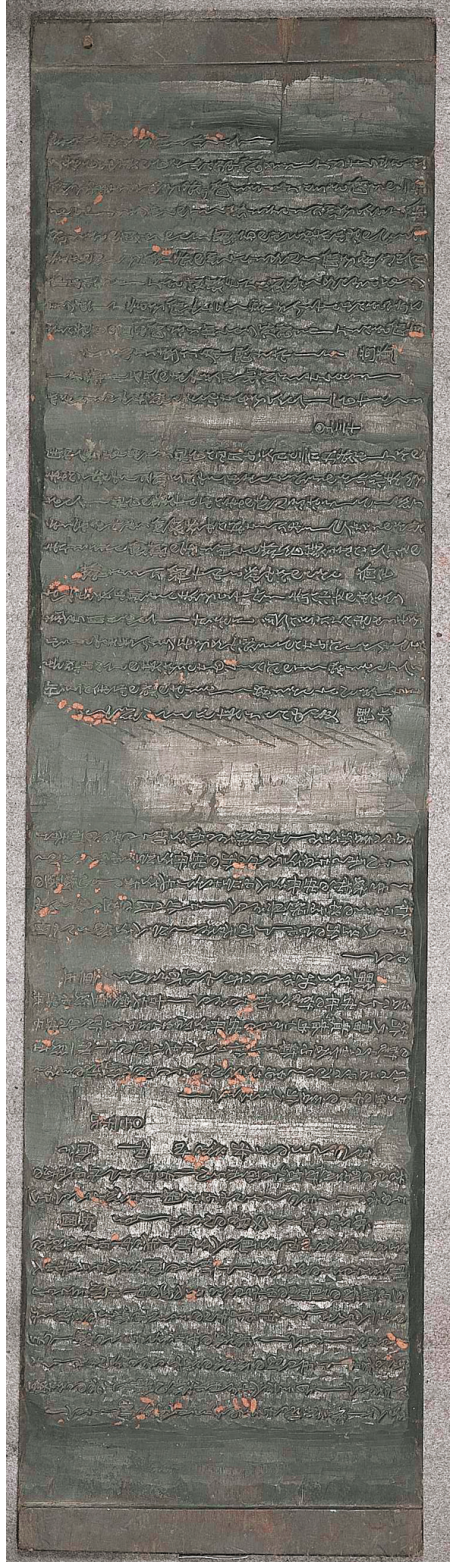




図5 『冬の日注解』板木拓本複写 U30T・29J

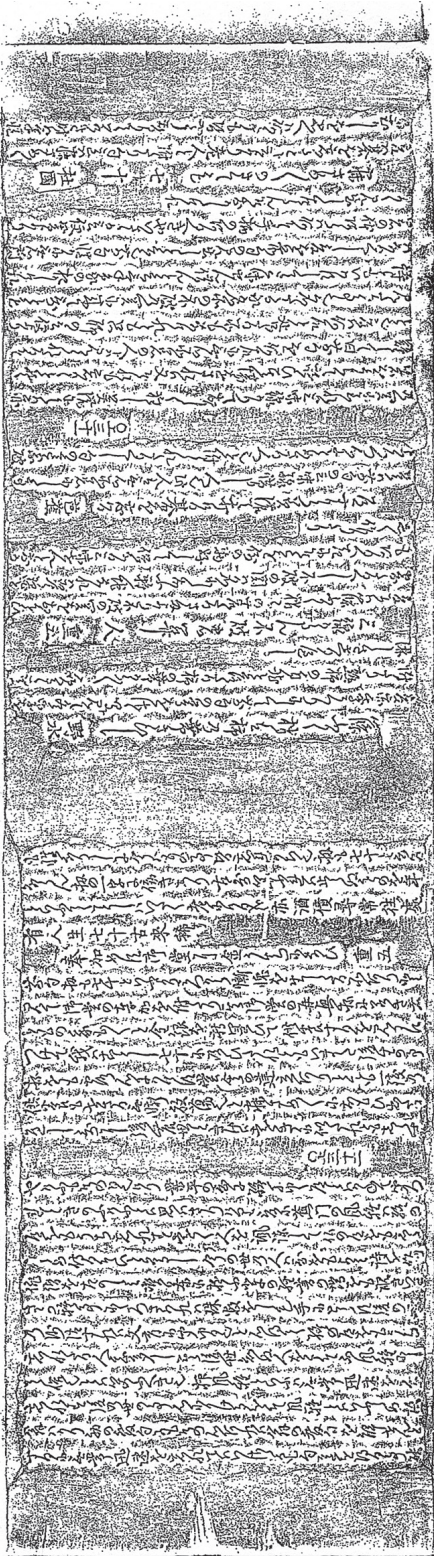


図6 同上 板木拓本複写 U31T・32J

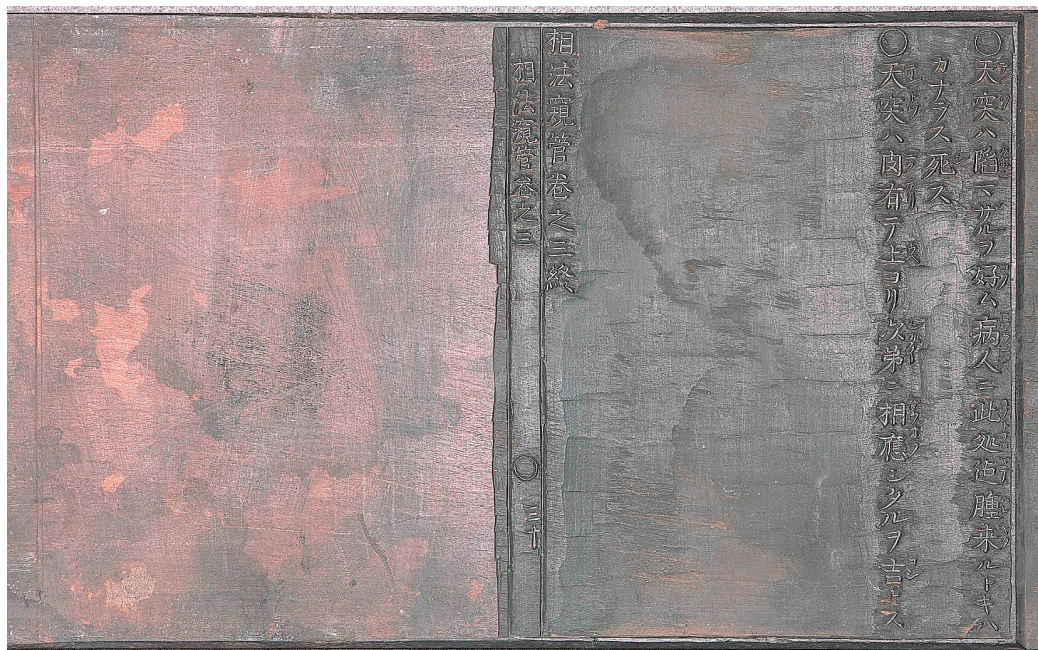


図8 『相法窺管』板木 卷3の30丁



図9 同上 卷4の21丁